

世界文学全集 1

シェイクスピア

ハムレット

リヤ王 マクベス

ロミオとジュリエット

三神 勲 中野好夫 訳

河 出 書 房

世界文学全集 1 シェイクスピア



© 1967

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚 富雄
中島 健蔵

昭和35年 3月25日 初版発行

昭和42年 5月20日 28版発行

定価 390円

訳者 中野好夫
発行 河出朋久
印刷 中内佐光
装幀 原 弘

印刷・晒印刷株式会社
製本・岸田製本紙工業株式会社
本文用紙・国策パルプ工業株式会社
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・東洋クロス株式会社
同納入・株式会社石綿商店

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

ハムレット		一
リヤ王		一四五
マクベス		二六五
ロミオとジュリエット		三五三
訳 注		四九七
年 譜		五〇三
戯曲創作年代		五〇六
解 説		五〇九
	(訳 者)	

ハムレット

——デンマークの王子ハムレットの悲劇——

三
神
勲
訳

登場人物

クローディアス デンマーク王

ハムレット デンマークの王子、先王の息。

現王の甥

ボローニアス 内大臣

ホレーシヨ ハムレットの友人

レアーチーズ ボローニアスの息

ヴォルチマンド

コーネリアス ノールウェーへの特使

ローゼンクランツ

ギルデンスターン ハムレットの元の学友

オズリック

一紳士 廷臣

牧師

マーセラス

バナードー

フランシスコ

王宮の警衛の軍人

レナルドー ボローニアスの召使

俳優数人

墓掘り二人

フォーチンブラス ノールウェーの王子

ノールウェー軍の一隊長

英国の使節

ガートルード デンマーク王妃、ハムレットの母

オフィーリア ボローニアスの娘

男女の貴族、兵士、水夫、使者、従者たち

ハムレットの父の亡霊

場所

デンマーク

第一幕

第一場

真夜中。空に星が冷たくきらめいている。エルシノアのデンマーク王宮のゴシック式の城は、ほの暗い空に黒く不吉な影を投じている。城の堞壁^{ちやうへき}上の狭い通路、左右に城楼へ通じる戸口が見える。いかめしく武装した歩哨のフランシスコが前後に歩いている。時おり、闇の中をうかがう。小脇にかかえた矛^{ほこ}の先が無気味にきらめく。しばらくして、同じように武装したバナードー、一方の城楼の入口から現われる。おそろしそうに闇の中をすかして見る。突然、フランシスコの足音を聞きつけて、思わず大声で誰^{だれ}か呼^よぶ。

バナードー こらっ、誰か？

フランシスコ （急に振り返って）なに、きさまこそ

誰か？ 止まれ、名のれ。

バナードー （合言葉で）陛下万歳！

フランシスコ バナードーか？

バナードー そうだ。

フランシスコ （ほっとしたように）時刻どおりよく来てくれたな。

バナードー もう十二時だ。さあ、帰って休め、フランシスコ。

フランシスコ 交替か、ありがたい。やけに寒いや、それに、なんだか気分がよくない。

バナードー （鋭く）異状はなかったか？

フランシスコ 小ねずみ一匹

姿も見せなかった。

バナードー じゃ、ゆっくり休め。（行きかけるフラン

シスコの背後から）

それからな、ホレーショとマーセラスに会ったら、

今夜の歩哨の仲間だ、急げと伝えてくれ。

フランシスコ （足音を聞きつけて）来おったらしいぞ。こらっ、止まれ、誰か？

ハムレットの友人、学者のホレーショと軍人マーセラス現われる。フランシスコの誰何に、いずれも

合言葉で答える。

ホレーショ この国の味方。

マーセラス

デンマーク王の臣下。

フランシスコ おやすみ。

マーセラス

やあ、ご苦労、ご苦労。

誰と交替したのか？

フランシスコ

バナーダーだ。

ではおやすみ。

(フランシスコ退場)

マーセラス おうい、バナーダーー！

バナーダー

おうい。

どうした、ホレーシヨ君も来たか？

ホレーシヨ

(冗談に)ここに震えておるよ。

バナーダー

(近づいて、ホレーシヨの手を握り)

よく来てくれましたな。ご苦労だな、マーセラス。

ホレーシヨ

(からかうように) どうでした、やつこさん今夜も現われましたか？

バナーダー

(真顔で) いや、まだ姿を見せません。

マーセラス

そんなものは妄想にすぎん、とホレーシヨ

君は断定なさるのだ。

信ずる余地はまったくない、と申されるのだ、

わたたちが二度まで見たあのおそろしい姿をな。

で、ともかくこうしてここへお連れしたのだ。

一と晩じゅう歩哨に立ってれば、きつとまた

現われるにちがいないからな。まあ、なつとくのいく

まで

見ていただこう、言葉をかけてもらおうではないか。

ホレーシヨ ばかばかしい、まず出ないね。

バナーダー

まあ、ちよつ

とおすわりなさい。

ここでもう一度、貴君の耳に攻撃をかけますぞ。

要塞堅固に、あくまでわたしの話を受けつけようとな

さらんが、

二た晩もつづけてこの眼でしかと見とどけたのだし。

ホレーシヨ

では、すわって

一つバナーダー君からあらためてうかがいましょうか

ね。

(三人車座にすわり、バナーダーが話します)

バナーダー つい昨夜のことでした。

北斗星の西寄りのあの星が、そら、

ちやうど今光っている辺まで来た時でした、

マーセラスとわしとが——そうだ、

ちやうど鐘が一時を打っていました。

突然、亡霊が現われる。手に元帥杖を持ったいかめ

しい武装姿の亡霊である。暗闇の中を静かに進む。

最初に見つけたのはマーセラスである。彼ははつと

して思わず飛びあがる。

マーセラス しつ、出たぞよ、また、見ろ！

バナードー（立ちあがり恐怖の眼を見はりながら）お崩れなさった先帝陛下そのままだ。^か

マーセラス あんたは学者だ、ホレーシヨ君、話しかけてごらんさい。

バナードー 先帝陛下そっくりでしょう？ どうです、

ホレーシヨ君。

ホレーシヨ（言葉もなく、呆然として立ちすくんでいたが）まったく似ている、おそろしくて息がつまりそうだ。

バナードー 言葉をかけてほしそうな様子。

マーセラス

（ホレーシヨに）さあ、話し

かけてごらんさい。

ホレーシヨ（勇気をだして、一歩進み出て）何者だ、

きさまは？ この真夜中、

しかも、なんだその尊い軍装は、

おそれ多くも、先帝陛下ご在世中

ご着用あらせられたものではないか。言え、答えろ。

マーセラス や、怒ったぞ。

バナードー

見ろ、行ってしまうぞ。

ホレーシヨ（後を追いながら）待て、言え、言え、言わないか。

亡霊は闇の中に消える。三人は呆然として亡霊の消え去った後を見送る。

マーセラス 消えてしまった、何も答えたくないのだな。

バナードー（ホレーシヨのほうをふり向いて）どうした、ホレーシヨ君？

なんです、そんなに震えて、まっさおな顔をして、

これでも妄想ですか、どうです？

ホレーシヨ まったくもって信じられんことだ。

しかし、こんなにまで明白な証拠を

この眼でしかと見たのだから。

マーセラス

亡くなられた陛下に似て

いたでしょう？

ホレーシヨ まったく陛下そのままだ。

あの甲冑も陛下のとまったく同一だ、

あれを召して野心家のノールウェー王との戦に出陣なされた。

それにあの顔つきはポーランド王との談判の最中、憤

激のあまり

櫓にのった敵将どもを氷の上に投げ飛ばされた時その

ままの顔だ。

じつにふしぎだ。

マーセラス しかもこの真夜中、あのようないかめしい武装姿で、

もう二度までも、われわれ歩哨の前を通ったのだ。

ホレーシヨ なんと解したのか、ぼくにもはっきりわからんが、

しかし、これは、ひよっとすると何かこの国に不祥なことの起きる前兆かもしれないな。

マーセラス まあ、すわって下さい。誰でもいい、わかつているなら教えてくれ。

毎晩このように嚴重な警備を固めて

われわれ国民を苦しめるのは、いったいなんのためだ？

毎日毎日ひっきりなしに大砲は造る。

武器弾丸はどしどし外国から買いこむ、

船大工は次からつぎに徴発して、

日曜も休まず、牛馬のように仕事にかりたてる。

いったい、夜に目をついでこんなに猛烈に軍備を急ぐのは、なんのためなのだ？

教えてくれませんか。

ホレーシヨ じゃ、話しましょう。

もっともこれはほんのうわさ話ですがね。今しがたお姿を拝したあの先帝陛下に対して

君たちも知ってのとおり、先のノールウェー王フォーチンプラスが傲慢不遜にも

戦をいどんできた時のことだ。なにしろ先帝ハムレット陛下といえ、

武名一世にとどろいた方だ、一撃にして

さしものフォーチンプラスを打ち倒してしまわれた。

その結果、

紋章法によって定められた嚴重な契約にもとづいて

ノールウェー王はおのれの生命とともに所領地残らず勝利者ハムレット陛下の手に渡すことになった。

もちろん陛下のほうでも同様の領地をこの戦に賭けておられたのだから、

反対にフォーチンプラスが勝利をえた暁には

陛下のご領地が当然彼の手に渡ったわけだ。

こうして、相互契約に明記された

条文にしたがつて、ハムレット陛下は

フォーチンプラスの領地を手にお入れになった。

ところが、今その息子の、やはりフォーチンプラスと

いう名うての乱暴者が

血氣の勇にはやって

無謀にも、ノールウェー国境のここかしこに、食いしる目あての命知らずの無法者をかり集め

何かひと騒動もくろんでいるらしい気配があるのだ。当局のみるところでは、これはまさしく、

さきに彼の父親の失った領地を、武力に訴えて腕ずくで奪い返そうとの魂胆にちがいない、

というのだ。今このように軍備を急ぎ、

われわれがこうして警備を固め、
国じゅう上を下への大騒ぎも、もとは

みんなそのためだと、ぼくは思うのだ。

バナードーなるほど、そういえばそれに違いないな。第一びったり符合するではないか、あの不吉な影が、

武装姿で、われわれ歩哨の傍を、しかも

この戦争とは関係の深い先帝陛下そのまゝの姿。
ホレーシヨ（相手がひどく不安がるので、慰めるよう

に）なあに、そうひどく気にすることもあるまい。

昔ローマ帝国の全盛のころ、

大シーザー遭難の直前には、

ローマじゅうの墓はことごとく口を開き、さまよい出

た亡者の群れが

ローマの辻々で泣きわめいたという。

また空の星は紅蓮の焰の尾をひき、血の露が降り、

太陽の光はあやしくかすみ、海の汐の干満を

支配する月も完全に蝕けて

この世の終りかとさえ思われたということだ。

現にこの国でも、そら、あの大事件の直前

おそろしい運命の前ぶれとして、

来たるべき大凶事の前兆に、

天変地異が起って

われわれを驚かしたではないか。

ホレーシヨの博学な能弁に二人が耳をかたむけてい

る時、亡霊がふたたび現われる。ホレーシヨが最初

に見つけて、飛びあがる。

しっ、見ろ、またやって来た！

道をさえぎってやろう、祟るなら祟れ。（両手をひろ

げ、前に進み出て）止まれ、まぼろしめ！

声が出るなら、ものが言えるなら、

さあ、おれに言え。

お前の心をしずめ、おれの祝福ともなる

何か好いことがあるというのか、あったら

さあ、おれに言え。

この国のおそろしい運命の秘密でも知っているのか、

それがわかれば、今からでも避けられるのなら、

どうか言ってくれ！

それとも、生前奪い集めた財宝を

土の中へでも埋めておいたのか、それがあきらめられ

ず

きさまら幽霊は死後までも地上をうろつきまわるとい
うが、

(この時、鶏の鳴く声が聞こえる。夜明けが近づい
たのだ)

本当か？ はっきり言え——待て、言え。止める、マ

ーセラス！

マーセラス 矛で殴りつけてやるうか？

ホレーシヨ やれ、止まらなかつたら。

バナードー

(矛を振りまわして) ここだ！

ホレーシヨ

(後を追いつながら) ここだ！

三人が夢中で空を打っているあいだに亡霊は消え去
る。三人はわれにかえて呆然と互いに顔を見合わ
せる。そぼくなマーセラスがいちばんさきに後悔す
る。

マーセラス 消え失せた！

いかん、いかん、あんな気高いものに

乱暴な真似をしたりしては。

空気同様なんの手ごたえもありやせん、

打とうとすればするだけ、ばかをみるだけだ。

バナードー 何か言いそうにしたな、鶏が鳴きだす前に。

ホレーシヨ 鶏の声を聞くと、急にはっと驚いた、まる

で、罪人がおそろしい呼出しを受けたときのように。

暁を告げる鶏が

のどいっばいに朗らかな声をはりあげて

日の神を呼びさますと、その夜明けの警報に

火や水、大地や空気、

いたるところをさまよい歩く霊どもが

あわてて、おのが棲家すまかに逃げかえるということだ。

さっきの様子では、これはまんざら嘘ではないらし

い。

マーセラス 鶏の声を聞くと消えてしまった。

キリストさまのご降誕をお祝いする。

季節が近づくと、暁を告げる

あの鳥が一と晩じゅう鳴きつづけるという話だ。

そのため妖魔どもは一匹も姿を見せない、

夜の世界がきよめられて、星も魔力を投げず、

精霊もわるさをせず、魔女も通力を失う。

それほど、その季節は清らかで神聖なのだという。

ホレーシヨ わたしもそのことは聞いている。全然信じ

られんこともない。

聖なる降誕祭の話のうちにこそろしく息苦しい夜が

静かに明けてゆく。空がほのかに赤くそまってくる。

やっ、見たまえ、朝が赤いマントを着て

向こうの山の露をふんで、もうやってきた。

さあ、そろそろ歩哨をとこう。で、これは相談だが、今夜のことを、どうだお伝え申そうではないか、

ハムレット殿下に。殿下なら、きつと

われわれに何も言わないあの亡霊が口をきくに違いない。

賛成してくれますか？ これを申し上げるのは

殿下への真心からも、またわれわれの義務としても、

当然だと思うが。

マーセラス ぜひそういたしましょう。これからお目にかかれるのに

都合のいい場所をわたしが知っていますから。

(退場)

第二場

宮廷内の広い会議室、中央の大テーブルには正面に背の高い椅子——玉座——が二つ並び、テーブルの上には本や羊皮紙や白目鉛製のインク壺や砂入れや羽ペンなどが置かれている。王の登場を告げるりょうりょうたるトランペットの音が鳴りわたる。新デーンマーク王クロードィアス、王妃ガートルードを先

頭に、顧問官らがそれに従い、さらにポローニアスと息子子のレアーチーズ、ノールウェーへの特使ヴォルチマンドとコーネリアス、その他の廷臣、従者たちが威儀を正して登場する。最後に黒い喪服姿のハムレットが少しおくれで舞台に現われる。王と王妃とは正面の椅子にすわり、廷臣や従者らはその周囲に立ち並ぶ。新しい王の結婚式と戴冠式との重なる祝典後の最初の顧問官会議である。王、王妃をはじめみなはなやかに着かざり、顔は晴ればれと輝いている。この正面のきらびやかな群れと離れて、ひとりハムレットは腰をおろしている。その黒い喪服は周囲のはなやかなものと鋭い対照をなしている。冷たく無表情な顔は彼がこの公式の席にしぶしぶ出席したことを表わしている。

やがて国王クロードィアスが口を開く。弁舌さわやかである。

王 尊き兄上、ハムレット王崩御あそばされて、

その記憶もまだなまなましく、おのおの

悲しみを胸につつま、国をあげて

一つ嘆きに眉をひそむこそ当然ではあるが、されど、余は分別をもって自然の情とたたかい、

王の死をいたみつつも、悲しみにおぼれず、
ひたすら余がつとめを怠らぬよう日夜はげんでまいっ
た。

ここに余のかつての姉上をば
余の妃として迎えたのもじつにそのゆえにほかなら
ぬ。

武勇の国デンマークの王位を分つこの尊き妃を、
余はいわば、悲しみにしずむ喜びをもつて、
右の眼に笑みを浮かべ、左の眼には涙をたたえ、
葬儀に喜びの叫びをあげ、婚姻に嘆きの歌を聞き、
かつ楽しみ、かつ悩みつつ

余の妻に迎え入れた。その際にはまた

諸君の賢明なる意見をも徴し、諸君においても、
進んで余に賛成してくれた。改めて、ここに感謝す
る。

さて、諸君も知られるとおり、若輩フオーチンブラ
ス、

余の力をあなどつてか、あるいはおこがましくも
武勇ならぶものなき兄上の崩御によって

わが国が分裂混乱に陥るものと考えおってか、
この機に乗ぜんものとはかなき夢をいだいて、
しきりに使者を余のもとに寄せ、その昔

彼の父親が法の固い契約にもとづいて
勇壮無比の余が兄上に譲り渡した領地をば
返却せよと要求してまいった。この件に関して
余の対策を今日の会議にはかりたい。

まずこの書簡であるが、余はこれを
フオーチンブラスの叔父、現ノールウェー王にしたた
めた。

老衰して病床にある王は甥のくわだてをまだ
知らぬのだ。それゆえ、余はこの書簡によって、
ただちにその計画を中止させるよう要求した。

なんと申しても、このたびの陰謀に必要な軍隊といえ
ば、

すべて王の人民より徴発いたさねばならぬのだから
な。

さて、その使者として、コーネリアス君とヴォルチマ
ンド君、

君たち二人をノールウェー王のもとへ派遣して、
この中に詳細にしたためられた条項にもとづき、
その許された範囲内で

王と折衝する権限を与える。

では行きなさい、急ぎ使命を果たし、忠勤を示してく
れ。

コーネリアス
ヴォルチマンドはつ、仰せまでもなく、その覚悟でお
ります。

王 よく申した。では氣をつけて行け。

コーネリアス、ヴォルチマンドは敬礼して退場す
る。

王はレアーチーズのほうへ上機嫌な顔を向ける。
今までとは異なつたくつろいだ、親しげな口調であ
る。

それから、レアーチーズ、なんだつたかな？

願いの筋があると言つていたようだが、なんだな、レ
アーチーズ？

筋道の通つたことなら、デンマーク王はなんでも
望みどおりにしてやるぞ。何が望みなのだ、レアーチ
ーズ？

お前の頼みなら、いつでも聞いてやっているではない
か？

デンマーク王とお前のお父さんとの間柄はな、
頭もこれほど心臓に近しくはあるまい、

手もこれほど口の言うままにはならぬだろう。

なんだ、お前の望みは、レアーチーズ？

レアーチーズ
おそれながら陛下、

フランスへたち戻るお許しをいただきたいのでござい
ます。

わたしが喜んでデンマークへ帰つてまいりましたのは
陛下の戴冠式に参列いたすためでございました。

もはやその務めも無事果たしましたので、正直に申し
ますれば、

ふたたびフランスへ戻りたくて矢も楯もたまらないの
です。

それで、陛下のお許しをいただけましたらと存じまし
て。

王 お父さんは許してくれたのか、どうだ、ポローニア
ス？

ポローニアス はい、^{せがれ}倅め、さんざんせがみよりまして
な、

むりやり手前の許しをもぎとりました。それで手前も
しぶしぶ承諾の判こをべったり押しましてございま
す。

どうぞ、出発のお許しをおつかわし下さいまし。

王 よろしい、では自由に行くがいい、いとまをやるか
ら。

せいぜい愉快に勉強してくるのだぞ。

それはそうと、ハムレット、今度は余の甥でもあり息

子でもあるお前だが……

王は椅子から立ってテーブルのはしまで来て、ハムレットに言葉をかける。王は依然として上機嫌で、ハムレットに笑顔を示している。しかし、王の表情や言葉にはなんとなく不自然なものがある。

王の言葉とともに、今まで冷たく無表情だったハムレットの顔に激しい内心の感情の波が現われる。傷ついた人が傷口にふれられるのをおそれるように、ハムレットは直接王に話しかけるのをおそれているのだろうか。

彼はすわったまま横を向いて、最初の謎のような傍白を発する。それは王に対する皮肉な毒矢のようだ。

ハムレット (傍白) 血はかよっても、心はかよわぬ。

王 (ハムレットの傍白を無視して) どうしたのか、

お前の顔にはいつも暗いかげが消えぬようだが？

ハムレット そうでしょうとも、どうせ日陰者ですからね。

王妃 (これは少なくとも王に対する侮辱である。つまりかねて王妃が口をだす) ねえ、ハムレット、そんなに暗い顔をするのをやめて、

王さまをもっとやさしい目でごらんさないね。いつも眼を伏せて、あの世においでになった

あなたのお父さまのことばかり考えるのはおよし。ねえ、わかっておいでだろう、生きているものはいつかはかならず死んで

あの世で永遠の命を授かるというのが当りまえだものね。

ハムレット (たのしげに) そうですね、当りまえなんでしょうね。

王妃 それなのに、

なぜあなただけにそれが特別に見えるのでしょうか？

ハムレット (心の傷にふれられたように、急に激しく)

見える？ いいえ、事実そのなのです。見えること

なんか問題ではない。

お母さん、この黒い外套だけではないのですよ、

仰々しい黒ずくめの喪服でもないのです、

わざとらしい大げさな嘆息なげきでもありません、

それからまた眼からあふれる涙の泉でも、

無理にゆがめてみせる顔つきでもありません、

そのほか悲嘆を表わすいろいろな扮装まわづかやしぐさ

そんなものではわたしの本質は表わせません。なるほど、

ど、

見えるというのはそういうことかもしれない、

見せびらかしの、すぐ誰にでも真似まねのできる身振り狂

言。

わたしの心の中にあるものはそんな見世物とはちがう。

そんなものはただ悲嘆の表飾りにすぎないのです。

王

(ハムレットの激しい勢いに王妃はたじろぐ。見かねて王が割って入る) それはもちろん、やさしい、感心な心がけにはちがいないが、

お前がそうして亡き父の喪に服するのはな、ハムレット。

だが、考えてみなさい、お前の父も父を失ったのだ。

その父も父を失った。そして後に遺された者は

子たる者の義務として、ある期間だけはかならず

喪に服さねばならぬ。しかし、いつまでも

かたくなな哀傷におぼれることは神意に反する

強情なふるまいといわねばならぬ。第一、男らしくない。

これはまさしく神に逆らう意志の現われであり、心に信仰なく、いささかの忍耐もなく、

思慮分別をまったくわきまえぬ証拠なのだ。

それが必然だということは誰でも知っていることだし、

誰の耳目にもふれるものと同様、じつにありふれたこ

とではないか。

それをなぜ駄々っ子のように

悲しんでばかりいろのだ？ よせよせ、みっともないぞ。

そうしたふるまいこそ、天にそむき、死者にそむき、

人情にそむき、

そのうえ、理性の教えにもとるというものだ。

理性は常に父の死ということを説いているではないか。

人間の最初の死からこの方いつも

叫びつづけているではないか、「これが必然だ」と。

どうか無益な嘆きを振り捨てて、

余をまことの父と思ってくれ。余はこの場で宣言して

もよいぞ、

お前こそ余の王位を継ぐべき人だ、

そして余はもっとも慈悲深い父親におとらぬ

深い愛情をもってお前を愛しておるのだと。

それなのに、お前はふたたびウィッテンバーグの大学

へ

帰りたいと言っているそうだが、

それはどうあっても許すわけにはいかぬ。

どうか頼むから、この土地にのこって